えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友
EDO-TOMO

第81号
平成26年
(2014)
9 ― 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京の庭園を巡る②　岩崎家の築いた庭園
「清澄庭園」「旧岩崎邸庭園」「殿ヶ谷戸庭園」……1～2
友の会特別企画「富岡製糸場の歴史と文化」
―世界遺産登録を祝って―……3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「王子権現のルーツを尋ねて」、「しばられ地蔵とほうろく地蔵」/ えど友サークルだより / 友の会めも
友の会セミナー「寄席文字・江戸文字を楽しむ」……6
友の会セミナー「大変だった！将軍の大名庭園見物」……7
見学会［切絵図で歩く『鬼平犯科帳』(1)］……8
常設展示室の紹介「江戸城と町割り」……9
江戸博クリップ「なぞのシャカシャカシャカシャカ♪」……9
江戸名所図会を歩く⑮［鮫頭明神祠から鈴森八幡宮］…10
催事案内 / 会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京の庭園を巡る②

岩崎家の築いた庭園
「清澄庭園」「旧岩崎邸庭園」「殿ヶ谷戸庭園」

都立庭園巡りの２回目は、三菱財閥を創設した岩崎家が築いた３庭園をご紹介します。
なお、都立９庭園では10月から11月にかけての東京文化財ウィークの期間中、さまざまな催しが行われます。
併せて参加されてみてはいかがでしょうか。

▲清澄庭園
（大泉水と涼亭）

▲ 旧岩崎邸庭園
（洋館正面玄関）

▲殿ヶ谷戸庭園
（紅葉邸から見下ろす次郎弁天池）

●清澄庭園

岩崎家三代の当主が築いた明治を代表する回遊式林泉庭園です。岩崎彌太郎の好みで集められた全国の庭石が随所に配されて、独特の景観を構成しています。

＜庭園の歩み＞

かつてこの地には豪商・紀伊国屋文左衛門の屋敷があったと伝えられ、享保年間(1716～1735)には下総国関宿城主・久世大和守（くぜやまとのかみ）の下屋敷になりました。

明治11年(1878)に三菱初代当主・岩崎彌太郎が邸地を買い取り、三菱社員の慰安と賓客接待を目的とした庭園の造成に着手します。彌太郎は全国から名石を収集し、隅田川から水を引き入れた潮入の大泉水を設け、明治13年に「深川親睦園」として公開しました。彌太郎の死後、弟の彌之助（２代目）が洋館（ジョサイア・コンドル設計）、日本館を建設するなどして工事を継続、明治24年(1891)に庭園は完成しました。後に彌太郎の長男の久彌（３代目）が涼亭を建てています。

大正12年(1923)の関東大震災では大きな被害を受けますが、近隣住民の避難場所となり、多くの人命が救われました。翌年、久彌が東京市に庭園東半分を寄付、昭和7年(1932)に「清澄庭園」として開園しました。昭和54年(1979)には東京都の名勝に指定されています。

＜園内の見所＞

・名石巡り……景石(庭を構成する上で重要な場所に用いる庭石)が園内に52カ所設置されています。それぞれの石には採石地を記した立札がついていますので、園内小旅行が楽しめます。また、景石以外にも水鉢、飛石、磯渡り、燈籠、石橋など、多くの石と石造物が配置されています。

・バードウォッチング……飛来する野鳥は20種類以上にも上り、都立庭園の中でも群を抜いています。特に冬場は数が多く、おすすめです。

・涼亭……明治42年(1909)、国賓として来日した英国陸軍のホレイショ・キッチナー元帥を接待するために建てられたもので、関東大震災と東京大空襲で唯一残った建物です。「東京都選定歴史的建造物」に選定されています。

▲雪見燈籠と中の島

＜花だより＞

秋にはハギ、サザンカ、ヒガンバナ、ツワブキ、ハゼの紅葉などが楽しめます。

●旧岩崎邸庭園

岩崎家の第3代当主・久彌の本邸として造られました。往時は広大な敷地に20棟もの建物が並んでいましたが、現在は3分の1の敷地となり、洋館・撞球室・和館の3棟のみが現存しています。

＜庭園の歩み＞

かつては越後高田藩榊原家中屋敷があり、明治11年(1878)に岩崎彌太郎が邸地の一部を購入して岩崎家本邸としました。明治29年(1896)には洋館と和館が久彌の本邸として竣工し、のちに撞球室が完成しました。関東大震災の際には、地元市民の避難に屋敷が開放されています。

▲芝庭に面した洋館南側

戦後はＧＨＱの接収を経て、昭和28年(1953)に政府の所有となり、庭園はグラウンドやテニスコートとして使用されます。昭和44年(1969)には和館の大部分が取り壊され、庭の西部に司法研修所が建てられました。平成13年東京都に移管され、「旧岩崎邸庭園」として開園しました。

＜園内の見所＞

・洋館……ジョサイア・コンドル設計による木造2階建ての建物で、イギリス17世紀初頭のジャコビアン様式を基調としています。昭和36年(1961)に撞球室と共に重要文化財に指定されました。邸内では様々な意匠が目を引き、2階のベランダからは芝庭や樹林が一望できます。

・撞球室……洋館と同じくコンドルの設計です。アメリカ木造ゴシック様式の建物で、外観はスイスの山小屋をイメージさせます。残念ながらビリヤード台は残っていません。

・和館……書院造りの大広間を中心とした3部屋のみが現存します。かつては岩崎家の行事に使用された場所です。昭和44年(1969)に大広間が重要文化財に指定されました。内部では日本画家・橋本雅邦の筆と伝わる障壁画を多数見ることができます。

＜花だより＞

秋には洋館正面の大イチョウが黄金色に輝き、一段と趣が増します。

●殿ヶ谷戸庭園

武蔵野台地南西部の「国分寺崖線(がいせん)」と呼ばれる段丘崖と、その下端部から浸出する湧水を利用し、雑木林を生かして造られた回遊式林泉庭園です。昭和初期に岩崎家別邸となりました。

＜庭園の歩み＞

前身は大正初期に造られた江口定條(さだえ)(後の満鉄副総裁)の別邸「随宜園」です。昭和4年(1929)、岩崎彌太郎の孫・彦彌太が取得して本館や紅葉亭を建設すると共に、武蔵野の自然と調和した庭園を完成させました。

昭和40年代には国分寺市再開発計画により、庭園は消失の危機に陥ります。しかし、地元住民による再開発反対運動と別邸の緑を守る運動が展開された結果、東京都が買収することとなり、昭和54年(1979)に「殿ヶ谷戸庭園」として一般公開されました。その後平成10年に東京都の名勝、平成23年には国の名勝にそれぞれ指定されています。

▲馬頭観音

＜園内の見所＞

・本館……岩崎家別邸当時は「国分寺の家」と呼ばれ、西洋のカントリーハウスの趣があります。

・次郎弁天池……園内にあるハケ(崖線)の湧水を利用して造られた池です。周囲にはモミジなどのうっそうとした樹木が繁っています。

・馬頭観音……国分寺市内に11基残る馬頭観音の一つで、馬の供養のために祀られたものです。

・山野草と木と花……武蔵野の雑木林でかつて見られた、多くの植物に触れることができます。また、都内の庭園には珍しい孟宗竹の竹林も見応えがあります。

＜花だより＞

四季を通じてさまざまな花に彩られますが、初秋にはハギのトンネルが姿を現します。また紅葉の時期には、崖の上の紅葉亭から見下ろすイロハモミジが見事です。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

※参考資料

東京都公園協会発行『清澄庭園』『清澄庭園　景石・石造物めぐり』『旧岩崎邸庭園』『殿ヶ谷戸庭園』

友の会特別企画（平成26年8月1日）

「富岡製糸場の歴史と文化」

―ユネスコ世界遺産登録を祝って―

このたび「富岡製糸場と絹産業遺産群」のユネスコ世界遺産登録が決定しました。これを祝っての特別企画として、富岡製糸場総合研究センター所長・今井幹夫さんの特別講演会が行われました。

当日は227人という多くの方が来場され、関心の高さをうかがわせました。また、講演に先だっての畠中会長のあいさつでは「友の会では３年前に富岡製糸場の見学会を行っており、先見の明があった」との言葉もありました。今井さんの講演は多数のスライド写真を用いて、富岡製糸場の歴史と施設が分かりやすく説明され、とても意義のあるものでした。盛りだくさんの内容の中から、その一部をご紹介します。

富岡製糸場の出来るまで

器械製糸場設立の発端となったのが、幕末に大量輸出されていた生糸と蚕種(蚕の卵)の粗製濫造問題でした。その中には、蚕種によく似た菜種を種紙に貼り付けるという「笑い話の種」になりそうなものも含まれています。

明治３年(1870)、模範製糸場の設立の儀が明治政府より出されます。その中ではヨーロッパの製糸器械の導入、外国人を指導者とする、日本全国から入場させた工女による新技術の習得、新技術習得工女を地元の指導者とする、といった点が示されています。国家事業として製糸業を推し進めようとする方向性が明確です。

これに基づき、当時最新のフランス式製糸器械が導入され、ポール・ブリュナを首長とするフランス人技術者が迎えられます。ブリュナは群馬県・長野県・埼玉県を回り、富岡に製糸場設立を決定します。元々養蚕業の盛んな土地であったなど理由はさまざまですが、ブリュナが「生まれ故郷に似ているが、ただ一つ違うのはブドウの栽培をしていないことだ」と述べているのはなかなか興味深いものがあります。

建造物と設備

明治５年(1872)に完成した建物の設計はフランス人によるものでメートル法ですが、建てたのは日本人大工のため尺貫法に読み替えています。木骨煉瓦造で造られ、煉瓦の積み方はフランス積(フランドル積)です。これはベルサイユ宮殿の煉瓦

▲東繭倉庫（画像提供：富岡市・富岡製糸場）

部分と同じです。また、煙突には日本で初めて避雷針が取り付けられました。このほかフランス人技術者の宿舎には、大理石のマントルピース、バスタブ、地下倉庫などの設備がありました。全体として当時の文明の最先端をいっていると思います。

こういった建物や設備が官営、三井家、原合名会社、片倉工業へと経営母体が移る中で115年間も使用され、現在も保存・管理されているというのは実に驚くべきことです。特に昭和62年(1987)に操業休止した片倉工業が18年間も保存し、富岡市に引き継いだことは賞賛に値します。

工女たちの生活

今日「製糸場の女工」といえば「女工哀史」という言葉が連想されるほど劣悪な労働環境がイメージされますが、富岡製糸場の「工女」(官営工場ではこう呼ばれた)の場合はかなり異なっていたようです。ブリュナが政府に出した計画書によりますと、１日の平均労働時間が何と７時間45分。電灯の設備がなく、日中しか作業ができないという事情があるにせよ、当時としては画期的です(当時のフランスの女工は12時間労働)。

さらに休暇が日曜日や夏休みなど年間80日以上あります。また、福利厚生も充実していて、常駐のフランス人医師による医療は無料、三度の食事も無料、夏・冬の服代も支給されます。給与は最上級の１等工女が１円75銭(現在の３～４万円)で、さほど高額とも思えませんが、諸費用の自己負担がないことを考え合わせると、恵まれている方ではないでしょうか。

世界遺産への道

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は平成19年１月に世界遺産の暫定リストに記載されていましたが、今回政府の推薦書提出(平成25年１月)、イコモス(ユネスコの諮問機関)の評価(平成26年４月)を経て、世界遺産委員会(平成26年６月)で登録が決定されました。

今回登録された４つの構成資産は①富岡製糸場②田島弥平旧宅(近代養蚕農家の原型)③荒船風穴(蚕種の貯蔵施設)④高山社跡(養蚕教育機関)です。講演では、これらが密接な関係を持って製糸業を発展させたことが分かりやすく図示され、全体像をつかむことができました。改めて世界遺産登録にふさわしい文化遺産だと思います。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

えど友 会員交流欄

会員からの投稿

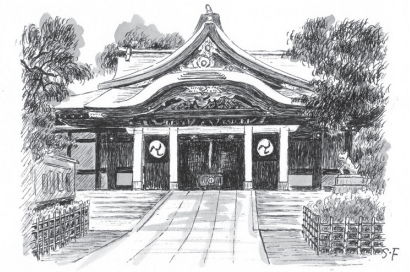
王子権現のルーツを尋ねて

髙　澤　金　吾

私の産土神は王子権現(東京都北区王子神社)で、由緒によれば元亨(げんこう)2年(1322)後醍醐天皇の御代に、時の領主豊島氏が熊野から勧請したのが始まりとある。豊島氏は平安後期にはすでにこの辺の領主で、太田道灌に亡ぼされるまで威を振るっていた。北区には旧館跡附近に豊島の地名が残っている。王子権現は若一王子宮(にゃくいちおうじのみや)と称し、その地形を熊野権現に見立て、境内の南麓に流れる石神井川を音無川とし、対岸の丘に飛鳥明神を祀り飛鳥山と称した。寛永年間、飛鳥明神は王子権現境内に遷座される。王子権現は徳川家康が江戸に入るまでは、北条氏の庇護を受けた江戸周辺の最大の神社であった。『江戸名所図会』に描かれている境内の楼門・舞台・本殿等は徳川家光により改築されたもので、日光東照宮より2年古い貴重な建築物であった。私の子供の頃この境内でよく遊んだが、残念ながら昭和20年(1945)4月13日の空襲で全てが灰燼に帰してしまった。

さて王子権現のルーツは熊野とされているが、以前から一度確かめたいと思っていたので退職してまもなく熊野を訪れた。熊野三山に詣で、何か王子権現のルーツの手がかりがないか探したが、なかなか分からず、最後に新宮市内の阿須賀(あすか)神社を尋ねた。ここは熊野発祥の地とされ、貴重な考古学的遺跡・遺物が多数発掘されている。阿須賀と飛鳥が何か関係があるように思われた。境内の神社由緒略記板を読むと、あるくだりに「……歴朝名族の崇敬殊に深く近郷末社少なからず、今東京飛鳥山は元亨二年豊島景村当権現勧請す……」とあった。やっと探し当てた喜びとともにルーツの確信を得た。参詣後、無人の境内を私共夫婦であちこち拝見していると丁度神主さんが出てこられたので、東京王子の権現様の氏子でルーツを探し尋ねて来たのだと話すと大変驚かれ、いろいろ神社の歴史にまつわる話をしていただき資料等も頂戴した。長年の思いがかない熊野まで尋ねたかいがあった。

王子権現は現在立派な社殿が再建され、戦後途絶えていた祭礼の際の田楽舞も復活して氏子達の崇敬の念は今も変わっていない。なぜ王子権現にこだわるのか、昔の喧嘩祭の境内の熱気が忘れられないのか、自分でもわからないが、多分王子村の土着人の血が流れているからかも知れない。



▲王子神社　イラスト：福島信一さん

しばられ地蔵とほうろく地蔵

百目鬼喜久男(どうめき)

東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅を出て、徒歩5分ほどのところに林泉寺があり、しばられ地蔵は丘の上の本堂に通ずる石段の途中にある。「しばられ地蔵」と書かれた板屋の中に、麻縄で全身を縛られ、わずかに顔をのぞかせた石の地蔵尊が立っている。何ともお気の毒な姿の地蔵尊だが、地蔵尊にお願いをする際には地蔵さんを縄で縛り、願いが叶った時には縄を解くものとされている。まだこれだけ縄が巻かれたままになっているのは、願いが叶わない人が大勢いるということなのだろうか。お地蔵様は、困った人々の悩みを全身に背負ってくださっているのであろう。

しばられ地蔵の由来は、「地蔵尊の前で反物を盗んだ犯人を捕まえるため、その石地蔵を縄で縛り奉行所に運び込んだ。その時一緒に奉行所に入った見物人たちに、罰として反物を持参させ、その中にあった盗品を手がかりにして犯人を捕まえた」という江戸時代の南町奉行『大岡政談』に基づくもので、所願成就の霊験あらたかな地蔵として江戸庶民に親しまれたという。

葛飾区東水元の南蔵院にもしばられ地蔵があるが、どちらが本家なのかは明らかでない。なお、こちらの地蔵は麻縄ではなく、わら縄で縛られている。

文京区の向丘高校の隣にある大円寺の赤門を入ると、すぐ正面に「ほうろく地蔵尊」と書いた提灯を左右に下げた地蔵堂が見える。ほうろくとは、茶やゴマを煎るのに用いる素焼きの皿である。まず目を引くのは、お堂の前に吊された色とりどりのたくさんの折り鶴と、うず高く積まれたほうろくである。ほうろくには奉納者の名前と、心願成就などと墨書され、お堂の奥に立つ石地蔵の頭には、4枚のほうろくがかぶされている。

ほうろく地蔵の由来は、放火の罪に問われ火あぶりの刑になった八百屋お七を供養するため、地蔵尊が自ら焼いたほうろくを頭に乗せ、焦熱地獄に置かれたお七を救ってくださるといわれる。

白山下から、浄心寺坂を入った左に「八百屋於七地蔵尊」があり、その脇の参道奥の円乗寺本堂前に「八百屋於七之墓」がある。円乗寺と大円寺はほど近く、このあたりが八百屋お七にゆかりの深い地であることを思わせる。

江戸時代の庶民は、お地蔵様は何でも願いを聞き届けてくださるという思いを持っていたのであろう。寺の立派なお堂の奥に祀られた仏と異なり、地蔵尊は寺の入り口や路傍に

立ち、人々の願いを身近に聞いてくださる。地蔵尊ほど庶民に親しまれた仏はなく、地蔵尊にまつわる民話が全国に数限りなく残されているのがその証拠である。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

6月17日(火)月番島田昭さんで六代目円生の名高座二席を観賞。最初は「寝床」。家主の動物の唸り声のごとき義太夫を店子たちが無理やり聞かされる滑稽噺。二席目は「百年目」。店では丁稚たちに小言連発、超堅物を装っていた番頭が、花見で芸者連と舟遊び、陸に上がって戯れているところで店の旦那とばったり。運のつき(百年目)と思いきや旦那に諭され、ねぎらわれる人情噺。昭和の名人の本格的な真打話を全員堪能した。参加者19人。

7月は台風の為休会。

◆藩史研究会

6月13日(金)市川勝さんが「伊勢長島藩の歴史」の発表を行った。15世紀後半伊藤氏が長島城を築城。江戸時代に入り菅沼氏が長島藩を立藩、一時廃藩となるが松平(久松)氏により復活、その後常陸国下館から増山正弥が入封し増山氏が幕末まで続いた(2万石)。長島は木曽・長良・揖斐川の河口にできた中洲で、堤防で囲んだ「輪中」に人々が住んでいた。参加者19人。

7月11日(金)宇井教雄さんが「土佐藩＆土佐新田藩」の発表を行った。土佐の国のなりたちから戦国領主長宗我部氏の話に触れたあと、「山内一豊」から始まる土佐藩の分かりやすい説明があった。参加者19人。

◆古文書で「八丈実記」を読む会

6月12日(木)参加者7人。6月27日(金)参加者8人。7月10日(木)参加者8人。7月25日(金)参加者10人。以上4回で八丈島の島役人長戸路家に伝わる御用留(享保年間)のP38～57を解読した。

◆江戸東京を巡る会

7月7日(月)入谷の朝顔市を楽しみ、近隣の寺社、著名な建物、老舗を散策した。参加者46人。

◆江戸名所図会輪読会

6月19日(木)中川博充さんの担当で医王山国分寺～傾城が松を発表。国分寺市内にある医王山国分寺の一帯には、江戸時代すでに旧跡となっていた武蔵国分寺があった。その創建の歴史の壮大さと、江戸時代にはほぼそのあとは埋められ、住居や畑になっていたことなど、そのギャップに興味をかき立てられた。参加者20人。

7月10日(木)松本美智子さんの担当で武蔵野～府中驛舎を発表。南は多摩川、北は荒川、東は隅田川、西は秩父の山々を限りとする十郡に及ぶ武蔵野は万葉集をはじめとして、多くの歌集に取り上げられた。これら万葉から新古今などの和歌、西行物語など文学的な記述の多いパートを松本さんのなめらかな解説によって、堪能できた。参加者17人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

6月26日(木)『えど友』第56号10頁の「落語で江戸散歩⑮三方一両損」をなぞって歩いた。秋葉原駅電気街口に集合し、万世橋旧駅舎など見学し、神田、日本橋、銀座を巡って、南町奉行所跡にて解散。参加者45人。

6月29日(日)同じコースで参加者35人。

7月30日(水)今回は暑い時期なので外歩きをやめ、寄席鑑賞と納涼会のスペシャル版を実施した。お江戸上野広小路亭で「新鋭女流花便り寄席」を鑑賞し、納涼会は新装なった吉池ビルの最上階で行った。参加者46人。

◆日本の大道芸伝承会

6月19日(木)発声練習など基礎練習をした。新演目として、「心太売り」「仙人」等に挑み、また通常通り「南京玉すだれ」等を練習した。参加者3人。

7月13日(日)発声練習など基礎練習をした。参加者3人。

7月16日(水)発声練習など基礎練習をした。今回で3回目となる、9月20日(土)の深川江戸資料館主催イベントへの出演が決まって、練習にも熱が入った。参加者3人。

◆江戸を語る会

6月28日(土)会員の高田利正さんが「幕末・明治初期―江戸の医療小史―お玉が池種痘所と下谷和泉橋通り医学書界隈」と題して講演した。参加者12人。

*　*　*　*

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。

参加希望の方ははがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成26年6月～平成26年7月

◆役員会6月10日(火)13人。7月8日(火)13人。◆事業部会6月3日(火)25人。7月1日(火)25人。◆総務部会7月1日(火)19人。7月22日(火)22人。◆広報部会6月17日(火)9人。7月15日(火)12人。◆古文書講座　入門編：6月21日(土)午前78人・午後72人。7月19日(土)午前84人・午後70人。初級編：6月18日(水)午前65人・午後50人。7月16日(水)午前67人・午後54人。中級編：6月4日(水)午前43人・午後35人。7月2日(水)午前41人・午後34人。◆町方書上翻刻プロジェクト6月5日(木)A8人・B9人。6月19日(木)A7人・B10人。7月3日(木)A7人・B9人。7月17日(木)A8人・B10人。

カット：佐藤美代子さん

第142回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年6月28日）

「寄席文字・江戸文字を楽しむ」

講師　橘 右之吉さん［橘流寄席文字・江戸文字書家］

江戸文字の起源

江戸文字と呼ばれる文字は、その起源は700年前にさかのぼります。92代伏見天皇の第6皇子である尊円法親王（そんえんほうしんのう）が創始した青蓮院流の書体が「御家流（おいえりゅう）」として広く定着していきました。御家流の名は、伏見天皇から「これを伝えて家の流れとせよ」とのお言葉を賜ったことに由来するといわれています。そこからいろいろな流派に分かれていきました。

江戸文字とは

ここで江戸文字5体についてご説明します。

左から勘亭流（芝居文字）、次がお隣り国技館で使われている相撲字（根岸流）、まん中が寄席で使われている寄席文字、その隣が通常いわれている江戸文字、これは籠字（かごじ）という書き方で、そして最後が髭文字、わざと髭をつけています。前3つは一筆で書き、残りの2つはこしらえて書きます。

徳川幕府も早くから、我流の崩した書き方での書簡による各藩の争いを予測して、御家流を公用文字として統一を図りました。多少の崩しはあっても公式文書はすべて同じになりました。

8代将軍吉宗が室鳩巣に作らせて、今の国定教科書にあたるものを無料で全国に配布しています。300ある指南所の9割が御家流だったと言われております。

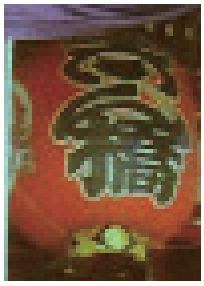
祐筆の書いた公式文書に奉行が花押を入れますが、小判も十両の字に後藤の花押が押されています。今の日本銀行のある所は、幕府金座御用の後藤さんの御屋敷跡です。反対側には幕府御用呉服所の後藤さんの屋敷があり、二人の間の橋を「五斗と五斗」で一石橋と言われるようになったそうです。

芝居の勘亭流は、安永8年（1779）中村座の狂言「御贔屓年々曽我（ごひいきねんねんそが）」の看板に御家流の書家、岡崎屋勘六が書いたのが最初といわれ、それが江戸中の評判となって勘六の号「勘亭」から勘亭流と呼ばれるようになりました。

また相撲字は、番付版元である根岸兼吉の工夫により相撲字が創始され、その書体は根岸流といわれています。この根岸流は行司さんの必須として伝えられています。下位の力士は細長く、上位は肉太の線で隙間を少なく書いているので、互いに力を出し合う様を表して、別名「力文字」と言われています。

ここに「いとう」という字がありますが、背景には縦と横に「イロハ」と「数字」のアドレスが入っています。字がどこを通っているか記録していくと、縦横自由に伸ばすことが出来ます。昔は今のようにコピーがありませんから、こうすれば普通の文字をどんな大きな字にも写すことが出来るのです。

これは広重の「名所江戸百景」の雪の中の浅草寺の境内です。提灯の下部分しか書かれていません。10年ほど前に浅草寺の提灯を作り替える時、江戸の昔の字体で書いて欲しいと依頼されました。江戸の浮世絵師たちは現物を忠実に描いていますので、他の画から探し出して書いたのがこの提灯です。この籠文字のハネ（髭）は縁起の良い七五三の奇数（吉数）になっています。



レポーターから

この後、右之吉師匠が今まで手掛けた「寄席文字めくり」「国立演芸場ポスター」「湯島天満宮祭り扇子」「招き看板」「襲名披露飾り絵馬」など数々の作品が披露されました。ご覧いただけないのが本当に残念です。

後半は、実演に移り、会場の皆さんから、お一人ずつリクエストの一文字を書いていただきました。希望者が多くて、予定の10名をオーバー、圓、喜、亀、樂、勇など、15名の方に贈呈されました。師匠は一つ一つの字について、軽妙な語り口で解説を入れ、時おりジョークを飛ばしながら楽しそうに、そして真剣に江戸文字をご披露していただきました。「勇」の字は間（マ）男と書きます…には会場爆笑でした。

和服姿の粋な橘右之吉師匠、まるで落語を聴くように面白い話が次々飛出し、思わず時間を忘れました。広重を「シロシゲ」と言い、同じ江戸っ子としてニンマリでした。参加者100人。

【記録】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・前田太門

第143回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年7月27日）

「大変だった！ 将軍の大名庭園見物 ―収集家小澤圭次郎の功績―」

講師 吉河 功さん（日本庭園研究会会長）

大名庭園を古地図から探す

大名屋敷は上、中、下屋敷があり、特に下屋敷にはしっかりとした作庭がなされていました。大きな大名になると下屋敷が三つもある大名もざらで、庭園は数限りなくあったと思われます。私たち「日本庭園研究会」で平成21年頃から「江戸庭園地図」の作成を始めました。江戸の古地図の中から文献の記録があった庭園を拾っていこうという試みです。古地図も江戸末期のものでやっと拾うことができる『天保大絵図』(人文社)を用意し、まだ完全ではありませんが、135邸ぐらいの屋敷を拾い上げています。もう一つ庭園の中にある楼閣建築を45棟ぐらい拾い上げました。楼閣は庭の景色を見る他に富士山、筑波山や海の景色を見るために作られています。

大名庭園とは屋敷のそばや後ろに作られた回遊式の日本庭園(後園)をいいます。実例としては六義園、小石川後楽園(江戸時代には後楽園)、旧芝離宮(江戸時代には大久保家の楽寿園)があります。江戸では大名以外でも旗本も大名並みの権力を持って屋敷に作庭していますが、これは大名庭園とはいいません。

将軍家光の御成と将軍家斉の御通抜け

御成は将軍、大名双方にとって大変お金のかかるやっかいなものでしたが、江戸初期においてはとても名誉なこととして歓迎されていました。寛政以降、財政的に困った状態の中で御成はたまたまそこを通りかかったという形をとって御通抜け(御通貫け)と呼ばれました。

『大猷院殿御実紀』には3代将軍家光が江戸城天守閣を間近に望む龍ノ口にあった蒲生忠郷邸［『寛永江戸図(武州豊嶋郡江戸庄図)』に松平伊予邸とある］御成の記録があります。それによると御成までに「柱には金を以て藤花をちりばめ、扉には仙人」の豪華な御成門を造営しています。寛永元年(1624)4月5日当日、屋内には宋徽宗皇帝筆の掛け軸などの書画、文房、茶具古今の珍宝が飾られ、山海珍味で饗応の宴が行われた後、家光は庭に下りて「桜花猶咲……木陰に筵席……池には樋をもって玉川の水……山路には樵径をつくり鹿の足あと……深林の下にかりの茶店をかまへ」名香をたきしめ小童の店主に接待させています。その後、数寄屋にて茶会(相伴は徳川頼房と藤堂高虎)、猿楽御覧があり、興に乗って夕暮れ時を過ぎ、帰りの道は篝火がたかれ白昼のようであったということです。

『甲子夜話』には文政8年(1825)2月9日の11代将軍家斉水戸家下屋敷小梅邸御成(御三家等親戚筋に行く場合は御成)記録が載っています。しかし実はすぐ南にあった水野邸の御通抜けが目的でした。そのため前日より近くのいくつかのお寺を貸し切り50人位の侍を待機させるなど、準備の詳細が詳しく書かれています。当日家斉は早朝向島で鷹狩し、雁と小鴨2羽を獲った後、水戸家下屋敷南の本所中之郷にあったその当時老中筆頭だった水野忠成の下屋敷に行っています。昼はそばにある大川(隅田川)に浮かべた舟の中で食事、午後も水野邸に戻って池で舟から網で鯉を獲ったりしました。夕刻になってやっと歩いて橋を渡り御成門から水戸邸に入り「御拳の鴨(鷹狩で獲った鴨)2羽」をみやげにしています。その間、警護の侍たちには紙に包んだ饅頭しか配られなかったと書かれています。

水野忠成邸は細川長門→水野出羽(忠成)→松平越前→佐竹右京大夫→札幌麦酒と所有が変遷し古地図でも確かめられます。佐竹家の下屋敷時代の庭が写真・軸絵で残っています。庭にあった石橋は昭和になって六義園に移されています。

小澤圭次郎の生涯と功績

小澤圭次郎［(号・酔園)天保13年・1842～昭和7年・1932］は桑名藩の藩医の次男として江戸築地の桑名藩下屋敷に生まれました。下屋敷には藩主の父である松平定信が造った極め付きの名園「浴恩園」がありました。医学・蘭学・漢学を学び、明治になって海軍兵学校教官、東京師範学校長補、東京学士会院書記を務め、余暇に自宅に庭園を造るほかに、名だたる庭園の破壊を憂えて古い庭園を記録し資料を収集していました。明治19年(1886)公務を退いてから、庭園の資料集めに奔走し、それを基に執筆を始めています。明治44年(1911)からは東京府園芸学校で講師として日本庭園史を教えていました。大正4年(1915)には調査の集大成として『明治庭園記』を発表しました。また日本庭園の設計(桑名・九華公園など)も行いました。集めた資料は「小澤園林叢書」として国立国会図書館の所蔵になっています。江戸時代の名だたる庭園の姿をうかがい知ることができるのは小澤圭次郎の研究のおかげだと思っています。

レポーターからひとこと

江戸の大名庭園の趣向を凝らした設計や見物、興味が尽きません。

参加者117人。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成26年6月8日）

［切絵図で歩く『鬼平犯科帳』(1)］

はじめに

池波正太郎の『鬼平犯科帳』は、実在した人物を主人公にしていますが、元よりフィクションです。しかし作者が、『江戸切絵図』を参考にしたというだけあって、切絵図に描かれているさまざまな場所が登場します。作中人物になりきって切絵図に登場する場所を歩いてみよう、というのが今回の見学会です。鬼平の役宅にほど近い九段坂から御先手組・組屋敷跡を経由して、合羽坂まで歩きました。

九段坂～俎板橋（俎橋）～役宅

梅雨が小休止している間に、東京メトロ九段下駅から順次出発しました。右手後方に田安門を見ながら坂を下りきると正面に俎橋(当時は「俎板橋」と表記)が見えます。その手前昭和館(蕃書調所跡)の角を右折すると、「葭簀張りの居酒屋」がありました(1巻「老盗の夢」ほか)。その前を道なりに進むと、千代田区役所に行き当たります。清水御門を正面に見据えるこの場所に、平蔵の役宅はありました。

役宅の前は、江戸城の濠に面した広い道で、役宅・正門の正面に「清水御門」が見える。［8巻「あきれた奴」］

▲半蔵濠の土塁と石垣

役宅～若年寄・京極備前守高久の麹町屋敷～平河天満宮

役宅を出た私たち一行は、清水門から入り田安門から城外へ出、左側に濠を見つつ「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」まで歩きました。濠の向こうに、鉢巻(土塁上に築かれた石垣)や腹巻(土塁)、腰巻(土塁の崩れを防ぐため、水際に築かれた石垣)が独特の景色を見せていました。元々腹巻の補強と石垣節約のための鉢巻と腰巻ですが、見るものの心を落ち着かせる優れた景観となっています。複数の大名屋敷を合わせた敷地に構える英国大使館が現れると、濠の向こうに半蔵門が見えてきます。この門と四谷門を繋ぐ道路の両側が麹町です。

▲平河天満宮

ここに鬼平の良き理解者であり庇護者でもあった若年寄・京極備前守高久の屋敷がありました。実際の屋敷は永田町でしたが、麹町にするため、京極飛騨守屋敷を京極備前守高久屋敷に設定したようです。平河天満宮は太田道灌が江戸城内に勧請した由緒ある神社ですが、慶長11年(1606)に現在地へ移されました。門前には鬼平が贔屓にしていた蕎麦屋・栄松庵がありました。

天満宮門前には、気がきいた、酒のうまい蕎麦屋・栄松庵があり［16巻「白根の万左衛門」］

平河天満宮～麹町四丁目～麹町八丁目～四谷御門

小伝馬町の首切り役人・山田浅右衛門の屋敷は、平河天満宮のすぐ近くにありました。しかし、不浄職を嫌ったからでしょうか。何の案内もないのは少々哀れを感じます。半蔵門から続く新宿通りの両側は麹町です。当時は8丁目までありましたが、現在は同じ範囲を6丁目までにまとめてあります。ですから鬼平の頃と場所は同じでも、丁名が異なることもあります。しかし昔も今も賑やかなことには変わりません。瓢箪屋(蕎麦屋)、梅之助の家(筆師)、伊勢屋(鰻屋)等の位置を定めながら歩くのは楽しい作業でした。

▲坂町坂

四谷御門外～七軒町～御先手組・組屋敷～法光寺～合羽坂

四谷見附跡の石垣を横目に見ながら濠を渡り、巻狩飴が名物の福本屋(菓子舗)や三徳屋治兵衛(蝋燭問屋)等を探し、定め歩くのは胸のつかえが解けるようでした。坂町は名前の通り、急な「坂町坂」に沿ってあります。建物は今風に変わっても、道幅は切絵図の頃と変わらず、狭くて曲がりくねっていました。七軒町や御先手組・組屋敷跡も坂町の一角にありました。津守坂の通りに出ると急に視界が開けました。坂を下りきった通りの向こうに合羽坂が見えました。

ここまでで、本日の全行程が終わりました。すぐ近くに都営地下鉄曙橋駅があり、そこで解散しました。次回が待たれるほど鬼平を身近に感じることができた見学会でした。

参加者149人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・菊池真一

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています。）

常設展示室の紹介

江戸ゾーン「江戸城と町割り」コーナーから

常設展示室では、毎週金曜日の午後4時から担当の学芸員が展示品を解説するミュージアムトークが開かれています。展示室を回るときのとても良い参考になりますのでおすすめします。

● 日本橋

常設展示室に入るとすぐ目に飛び込んでくるのが日本橋で、化政期の記録などをもとに日本橋の北側半分を復元しています。当時、日本橋を北側に渡った先に日本橋駿河町があり、三井越後屋江戸本店（ほんだな）がありました。常設展示室5階にこの本店の1／10の模型を展示しているので、ぜひご覧ください。復元した橋は、江戸時代の技術に沿って京都の大工が組み立てました。日本橋の床板、欄干などはヒノキ、橋脚部分などはケヤキを使用しています。橋脚の柱の表面は、鹿の子打ちがされ、でこぼこしています。また、欄干の擬宝珠のうち、万治元年（1658）の銘がある現存する擬宝珠のレプリカが2本あります。どこにあるか、探してみるのも面白いでしょう。江戸市中で擬宝珠のある橋は、江戸城に入る橋は別としてこの日本橋の他には京橋と新橋のみでした。

▲擬宝珠

● 「江戸図屏風」、「江戸名所図屏風」

この日本橋を渡ると江戸ゾーン「江戸城と町割り」コーナーになります。大きなガラス張りのケースには、「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）、「江戸名所図屏風」（出光美術館所蔵）のレプリカが展示されています。この二つの屏風には、多くの歩いている人々、たくさんの舟が描かれています。江戸時代の移動手段としては、徒歩または馬、かご、舟を使うことになります。大八車のように車輪のあるものもありましたが、あまり普及しませんでした。大量の物資を運ぶために運河が張り巡らされ、日本橋の近くにも有名な魚河岸をはじめ、さまざまな河岸ができました。

インターネットを利用している方は、「江戸図屏風」を次のホームページで詳細な画像を見ることができます。http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/edozu/

● 寛永の町人地

前述の二つの屏風と武州豊嶋郡江戸庄図（国立国会図書館所蔵）などを参考にして、寛永時代の日本橋北詰付近の町人地が1／30で復元されています。町の入り口に造られた3階建の家が見えます。このような家は江戸初期の町屋に見られましたが、慶安2年（1649）に幕府によって建築が禁止されました。平成15年の開館10周年を機に、人形800体ほどが配置され日本橋界隈の賑わいが再現されました。この模型をいろいろな角度からのぞいてみると当時の生活の様子がうかがえ、また一人一人の表情やしぐさを楽しむことができます。ぜひじっくりと味わってください。

▲寛永の町人地模型

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

江戸博クリップ

なぞのシャカシャカシャカシャカ♪

展示事業係学芸員　田原　昇（たはら　のぼる）

毎朝、自宅のあるマンションから歩いて10分ほど先にある保育園まで息子をお預けに行っております。手をつないでスタスタスタスタ。日に日に足と口が達者になる息子は、目についたこと、感じたこと、思い出したこと、さまざまなことについて素朴な質問を浴びせてきます。雲は何でできているの？　夏はどうして暑いの？　お相撲さんが戦う時に使う団扇みたいなものは何？　どうして鳥のフンは白いの？　バスとトリケラトプスはどっちが早い？　ミミズが道で死んでいるのは何で？等々です。

まだまだ小学校に入学する前のちびっ子でもあり、解答に使用できる用語や表現には多大な制約があります。だからこそ一層チャレンジングでもあり、丁寧かつわかりやすく時間をかけて答えています。時には数日がかりになることもあります。とにかくその時間が楽しくて楽しくてたまりません。ただ、わからない時にはハッキリと「わかりません！調べておきます」と答えるようにしております。そして明日までの宿題となりますが、最近は便利なものです。江戸博へ向かう電車内でインターネットを用いて調べてしまえば、十中八九、決着がつきます。

とはいえ、なかなか決着のつかない質問もあります。昨年来の懸案事項です。登園ルートの近所には、大きな森林公園があります。このため、夏ともなるとセミの鳴き声がうるさいくらいです。そこで息子からの質問。ミーンミンミンミー♪はミンミンゼミ、ジジジジジー♪はアブラゼミ、シャシャシャシャ♪はクマゼミ、じゃあこのシャカシャカシャカシャカ♪は何ゼミ？「わかりません！」しばらく調査が続きそうです。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…⑮

[鮫頭明神祠から鈴森八幡宮]

来福寺　山門

前回、最後に訪れた海晏寺の元の敷地は京浜急行の線路の東側までありました。それを示す海晏寺の石標が昔とほぼ同じ位置にあることをあとで知り、今回はその石標の確認から始めました。青物横丁駅から旧東海道を南下していく途中の、山側に入る横道が参道の入り口のあたりで、二基の石標が立っていました。石標からさらに南下していくと5〜6分で鮫洲八幡神社に着きます。

鮫頭明神祠から海賞山来福寺

鮫洲八幡神社は、図会では「鮫頭」で「さめづ」と記され、「往古此地へ丈餘の鮫の揚がる事ありしに、其頃此地大に疫疾流行せしかば、此鮫の祟りならんと恐怖して漁人其頭を一社の神に祀るとなり」とあります。が、これは海晏寺本尊の縁起と混同されているようで、創立年代もはっきりしません。この辺り一帯が御林町と呼ばれた頃にはこの町の鎮守として祀られていたようです。境内には台石に「町内猟師中」と刻まれた嘉永2年(1849)造立の石造の狛犬があり、漁師町の雰囲気が感じられます。境内の南側には弁天池があり、池の中の島に小さな弁天社がありました。

京急と東海道本線の間、丘陵地帯の住宅地の中にある来福寺に向かいます。階段を上ると、山門の左側に「御府内八十八カ所第廿六番　弘法大師」の石柱が立つ真言宗のお寺です。境内の庭園は見事に整備されていて、姿の良い松が中心にあり、図会にある「梶原松」ではないでしょうが、それを彷彿とさせる趣がありました。門を入った左側には貞享2年(1685)造立の庚申塔、その奥に雪中庵蓼太の句碑「世の中は　三日見ぬ間に　桜かな」があります。このお寺には延命桜と呼ばれる桜があって、桜の名所としても知られていました。右側の小さな丘には聖天堂があり、赤い山王鳥居が立っていますが、この山王鳥居は笠木の中央が凸状のちょっと変わった形をしていました。

納経塚から大井山光福寺

文亀元年(1501)僧梅巌が、とある経塚に通りかかると土中から読経の声がします。掘り起こしてみるとお地蔵さまが。これが行方不明になっていた来福寺本尊で、経読地蔵尊と呼ばれるようになりました。その経塚には源頼朝の納経説話があり、今は大井1丁目の庚申堂となっています。

庚申堂から大井三つ叉交差点を経て東南方向に下り、松栄山西光寺に向かいます。弘安9年(1286)の開創で元は天台宗でしたが、のちに浄土真宗となりました。このお寺も醍醐桜と呼ばれる名木をはじめとする老樹が多く、花の名所でした。図会の挿絵では山門を入ってすぐに兒桜の幼木が描かれています。唯一現存するこの桜は根元から太い5本の幹が空に広がり、今も毎年見事に花を咲かせているようです。本堂左手には江戸期に造立された石造の供養塔がありました。

▲来福寺　「世の中は　三日見ぬ間に　さくらかな」　雪中庵蓼太

西光寺門前の細い道をそのまま下り、しばらく行くと大井山光福寺です。山門をくぐると目に飛び込んでくるのはイチョウの巨木です。数多くの乳根が垂れ、東京湾に出漁する漁師たちが航行の際に目印にもしたといわれるほどです。この地は麻布山善福寺の中興了解上人誕生の旧跡で、墓地の一隅には「了解上人産生湯井」と呼ばれる横穴状の井戸があります。「大井」の地名はこの井戸に由来するといわれます。

鹿島大明神社から鈴森八幡宮

光福寺から少し行くと、池上通りとの合流点に鹿島神社の別当である来迎院が見えてきます。門前の通りを挟んだ向かい側には三つのお堂が建っており、江戸初期の念仏講供養塔が納められています。池上通りに出て左折すると鹿島神社の入り口です。ちょうど6月の末、拝殿前には夏越祓の茅の輪がしつらえてありました。安和2年(969)に常陸の鹿島神宮を勧請したこの社は大井村の総鎮守です。境内はタブノキやアカガシなど樹木が多く、梅雨の晴れ間の日差しを受けて緑が輝いていました。社殿の右側には文久2年(1862)に建てられた旧本殿が覆屋をかけて保存されています。柵の間からのぞき見ると、四尺四方の建物ですが華麗で細密な彫刻が施され、保存状態も良いようです。その前にはめずらしい石造の随身像一対が置かれていました。

池上通りを大森駅方面に進むと西口の向かい側の丘の上に天祖神社があります。急な階段を上って行くと、拝殿の前には源義家由来の「鎧懸松」の切り株が安置されていました。

さらに池上通りを南下し、山王二丁目交差点を左折してほぼ真東に向い、京急の線路を越すとすぐに磐井神社が見えます。図会では鈴森八幡宮で「総社磐井神社とも称せり」とあります。延喜式にも記載されている古社です。鈴ヶ森の地名発祥の元といわれる鈴石と、山型の自然石の上部に烏のような模様のある烏石は、江戸時代から有名で訪れる人が多かったようです。今は社務所の中にあり、声をかけないと見られません。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆９月から第２期を開講

すでに申込は締切っておりますが、9月から下記日程で第2期を開講します。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(東京文化財研究所研究補佐員)
- 開催日：9/3(水)、10/1 (水)、11/14(金)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/17(水)、10/15(水)、11/16(日)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/20(土)、10/18(土)、11/15(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●東京オリンピック・パラリンピック開催50年記念特別展「東京オリンピックと新幹線」

◆2020年に開催の決まった東京オリンピックにちなみ、1964年東京オリンピック・パラリンピックおよび新幹線関係の資料を中心に展示がなされます。この特別展について担当の行吉学芸員による「見どころ解説」をお願いしておりますのでご期待ください。
- 開催日：10月3日(金)17時～19時
- 申込締切：9月18日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会セミナー

第145回「子孫が語る土方歳三とその一族」

講師　土方　愛さん(土方歳三資料館館長)

◆土方一族の一人として多摩郡石田村に生まれた土方歳三。しかし幕末から明治時代の変遷期に、その運命は翻弄され明治２年(1869)に35歳で短い生涯を終えました。才気あり、当世豪傑と称された彼が、もし明治を生き抜いていたら、どんな人生を送ったかと想像したくなります。「子孫から見た土方歳三の人となり、また彼を生んだ故郷や土方一族、その背景について」生家に伝来する遺品などを紹介しながらお話しをしていただきます。

◆講師略歴：ひじかた・めぐみ
東京都日野市在住。土方歳三の生家に生まれ育つ。上智大学外国語学部卒業。平成23年より土方歳三資料館館長。講演「土方歳三忌、近藤勇忌、沖田総司忌の各記念講演」(新選組友の会)など。著書『子孫が語る土方歳三』(新人物往来社)、『英傑たちの肖像写真』(渡辺出版)。
- 開催日時：9月27日(土)14時～15時30分
- 申込締切：9月18日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第146回「川越と平林寺～知恵伊豆と呼ばれた老中松平信綱が作った武蔵野新田～」

講師　田中　潤さん(東京文化財研究所研究補佐員)

◆「川越」と「平林寺」について、古文書入門講座でおなじみの田中潤さんにご講演いただきます。川越は「小江戸」と呼ばれる城下町ですが、川越城や城下の大掛かりな整備と武蔵野開発を行ったのが、「知恵伊豆」として名高い老中・松平信綱(1596～1662年)。信綱は「島原の乱」を鎮圧したことで有名ですが、幕政ばかりではなく藩政発展にも大きく寄与し、川越整備のほか野火止用水の開鑿や野火止新田開発などの農政にも積極的にあたりました。「野火止」の平林寺は信綱一族の墓所。11月のバスツアー「川越市内見学と平林寺参拝」に先立ち、平林寺に造詣の深い田中さんから興味深いお話しを伺います。

◆講師略歴：たなか・じゅん
現在、力を入れている研究テーマ：近世・近代における有識故実(服飾・染織等)、江戸幕府御用絵師研究など。
- 開催日時：10月11日(土)14時～15時30分
- 申込締切：９月26日(金)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】五十島正修(事業部会)

見学会

「再訪　江戸城周辺の探訪―その５(外濠)」

◆このシリーズの最終回です。江戸城外濠は、江戸城外郭を東西約5.5km、南北約3.5kmの楕円形で囲み、いかなる敵をも寄せ付けない巨大な要塞です。この外濠は絶大な権力をもつ江戸幕府の天下普請により、江戸城総構え工事として完成させました。今回はその外濠跡に沿って、溜池～数寄屋橋門～常盤橋門までを散策します。現在はほとんど埋め立てられてしまいましたが、その周辺に残る遺跡、遺構を探訪し、江戸城外濠の壮大さと歴史をしのびます。所要時間は約3時間半、大手町呉服橋で解散となります。

- 開催日：10月5日(日)　12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ銀座線・南北線「溜池山王」駅7番出口(地上)　山王パークタワー前
- 申込締切：9月23日(火)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆・大澤憲一(事業部会)

広重「名所江戸百景」周辺探訪
ーその11(白金・目黒周辺)ー

◆広重「名所江戸百景」は安政期の江戸の四季、風景、風俗などをこまやかに描いた作品です。この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。今回は、白金から、目黒を経て、代官山までを歩きます。将軍家光は目黒での鷹狩の際、そこにあった茶屋の主人に気さくに「爺々」と話しかけたという。そんな逸話のある広重「目黒爺々が茶屋」絵や、目黒川に架かる太鼓橋付近一帯は晩秋ともなると、紅葉が夕日に映えて美しい景観を呈していたという、広重「目黒太鼓橋夕日の岡」絵、などを訪ねます。
(今回、訪ねる広重の作品)「広尾ふる川」、「目黒千代か池」、「目黒爺々が茶屋」、「目黒新富士」、「目黒元不二」、「目黒太鼓橋夕日の岡」

- 開催日：11月9日(日)　12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：都営地下鉄三田線「白金高輪」駅3番地上出口
- 申込締切：10月30日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆(事業部会)

会員優待のお知らせ

会期残り僅か お見逃しなく！

●「思い出のマーニー×種田陽平展」

会　期：7月27日(日)～9月15日(月・祝)
休館日：9月1日(月)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●東京オリンピック・パラリンピック開催50年記念特別展
「東京オリンピックと新幹線」

会　期：9月30日(火)～11月16日(日)
休館日：月曜日(ただし、10月13日、11月3日は開館、翌日が休館)
会　員：一般670円、65歳以上335円、大・専門生535円
同伴者：一般1,070円、65歳以上535円、大・専門生850円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●発掘された日本列島20周年記念
「発掘された日本列島2014　日本発掘」

会　期：7月26日(土)～9月15日(月・祝)
休館日：9月1日(月)
会　場：常設展示室6階　特設会場
常設展示室5階　第2企画展示室

●次回企画展
「モダン都市　銀座の記憶
ー写真家・師岡宏次の写した50年ー」

会　期：10月7日(火)～11月30日(日)
休館日：月曜日(ただし、10月13日、11月3日・24日は開館、翌日が休館)
会　場：常設展示室5階　第2企画展示室

お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記して下さい。お間違いないよう、お願いします。**

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号**(必須)**、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館「友の会事務局」

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてから ご参加下さい。

会報＜えど友＞第81号
平成26年9月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、田端道宏、光田憲雄、中山達雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話03-3626-9910